

千葉県漢詩連盟

平成二十九年三月 第四号

千葉詩藪



目次

『千葉詩藻』第四号発刊に寄せて 1

作品 3

相澤克典	青木智江	秋葉暁子	安食敏子	市川恵美子	稲田 啓
井上夏央里	岩澤和枝	薄井 隆	大澤建良	岡安千尋	小澤克巳
加藤 武	木村成憲	小嶋明紀子	小久保洋子	斎藤香枝	齋藤かつい
斎藤興二	斎藤房江	齊藤三千代	坂本光正	椎名 廣	清水義孝
菅原凉子	菅原 満	曾雌幸己枝	高橋秀彰	田邊閑雄	津田峻一
長島ツタエ	根津静男	信木充子	原口大助	宮崎三郎	宮本美恵子
森崎直武	矢尾 晃	八嶋溪風	柳田昌宏	山木康義	山下和子
山田紗代子	芳野禎文	鷺野正明			

千葉県漢詩連盟・役員 26

編集後記 26

『千葉詩藻』第四号発刊によせて

会長 鷲野 正明

千葉詩藻^{せんようしそ}第四号をお届けします。今号は若い新人の作品も加わり、ますます充実しています。
ご高覧賜れば幸いです。

千葉県漢詩連盟（略して千漢連^{せんかんれん}）には、作品発表の場が、五年ごとに発刊の『房総風雅』、一年ごとの『千葉詩藻』、半年ごとの『会報』（千葉詩壇）、随時のホームページ、と各種そろい、研修会、吟行会、漢詩創作講座が定期的に行われています。

平成二十八年の吟行会は、千漢連創立十周年記念の掉尾を飾る海外吟行を含めて四回行われました。その折りの作品は括弧内に示した媒体、ならびにホームページに発表しました。

三月二二日 千漢連^{せんかんれん}創立十周年記念、

　　～二六日 第二回台湾吟行（小冊子『臺灣花雨』を發行、会報二二・二三号）

六月 二日 臼井吟行（会報二三号に掲載）

八月 一日 有志による手賀沼観蓮会（同）

十一月三日 流山吟行（会報二四号に掲載）

『千葉詩藻』には、既発表の作も含めて、この一年間で各自最も気に入っている作品を掲載しています。

会の発展には会員どうしが楽しむことが何よりです。吟行会が例年より多く行われ、歩き回り・観察して詩材が増え、句を練り・詩を構成してますます詩心が養われ、会員が楽しみ・語るることによって、詩作にも熱が入ります。

今後ますます多くの新人を得て、なお一層会を盛り上げていきたいと思えます。

ご協力の程よろしく願います

賀千葉詩藻第四號發刊

攀岩直極小芙蓉

湖畔遙望雙紫峰

到處風光猶未忘

高吟各又引情濃

千葉詩藻第四號の發刊を賀す

岩を攀じて直ちに極む小芙蓉

湖畔遙に望む雙紫峰

到處の風光猶ほ未だ忘れず

高吟各おの又情を引いて濃やかなり

求悟

燈火幽搖夜入堂
不言不動靜閑場
心頭欲滅愁何盡
警策鳴時似有光

悟を求む

燈火幽かに揺らいで夜堂に入る
言はず動かず静閑の場
心頭滅せんと欲すれども愁ひ何ぞ尽きん
警策鳴る時 光有るに似たり

無有 相澤克典

赤子

嬰兒牀榻乳香冷
綏靜童歌透小櫺
阿母懷中溫易夢
忽看微笑忘時經

赤子

嬰兒の牀榻 乳香冷らかなり
綏靜の童歌 小櫺に透る
阿母の懷中 温かにして夢み易からん
忽ち微笑を看て 時の経るを忘る

青木智江

上巳節

習習暖風春正豪
枝梢破蕾笑紅桃
常懷雅宴蘭亭會
曲水流觴揮健毫

上巳の節

習々たる暖風 春正に豪たり
枝梢蕾を破りて 紅桃笑ふ
常に懷ふ 雅宴 蘭亭の會
曲水流觴 健毫を揮はんと

曉風 秋葉曉子

山中求涼

山館臨溪碧水清
猶忻風冷暑威輕
絶無蚊影況蠅影
夕暮如鈴蛙子鳴

山中に涼を求む

山館 溪に臨み 碧水清し
猶ほ忻ぶ 風は冷ややかにして 暑威は輕し
絶えて蚊影無し 況や蠅影をや
夕暮 鈴の如し 蛙子の鳴く

紅杏 安食敏子

散步震生湖

殘秋秦野澁丘郷
紅葉映湖霞彩光
地震裂山龍伏踞
水神化護辯財堂

震生湖を散歩す

殘秋の秦野 澁丘の郷
紅葉 湖に映じて霞彩光る
地震ひて山を裂き 龍伏踞し
水神は化して護る 弁財堂

溪燕

市川恵美子

獨浴温泉

湯泉花映澹無波
占斷春宵逸興多
二八佳人明月下
隔牆沐浴發清歌

ひとり温泉に浴す

湯泉 花映じ 澹として波無し
春宵を占断すれば 逸興多し
二八の佳人 明月の下
牆を隔て沐浴し 清歌を發す

稲田 啓

驟雨

倏忽暗雲遮日來
遙空閃閃一聲雷
何妨秋社兒童列
搖動神輿冒雨回

驟雨

倏忽暗雲日遮りて来る
遙空閃々一声の雷
何ぞ妨げん秋社兒童の列
神輿を揺動し雨を冒して回る

弘宥
井上夏央里

水榭求涼

池畔無人夜氣清
微風入袖葛衣輕
斷雲吞月水亭寂
恰好新蛩第一聲

水榭に涼を求む

池畔人無く夜氣清らかなり
微風袖に入り葛衣輕やかに
断雲月を呑み水亭寂たり
恰も好し新蛩第一聲

淑眞
岩澤和枝

九月九日偶成

與友登高野菊丘
摘花相酌乃忘愁
明年此會誰人健
幾度重杯強欲悠

驟雨

街頭白雨洗浮埃
天宇黑雲鳴迅雷
陣陣狂風消午熱
翻翻自在燕飛回

蹊山 薄井 隆

くがつこのみかくうせい
九月九日偶成

としとうこう
友と登高す野菊の丘
はなを摘み相ひ酌めば乃ち愁ひを忘る
けふねんこのかい
明年の此の会誰れ人か健なる
いくたひ
幾度か杯を重ね強ひて悠ならんと欲す

しゅう
驟雨

がいとうはくう
街頭白雨浮埃を洗ひ
てんうこくうんじんらいな
天宇黑雲迅雷鳴る
じんじん
陣々たる狂風午熱消え
はんはんじざい
翻々自在に燕飛び回る

大澤建良

那須國造碑

飢蚊來襲茂林中
小徑肅然塵漸空
刻字放光情思溢
官民從古愛仁風

那須の國造の碑

飢蚊來襲す茂林の中
小徑肅然塵漸く空し
刻字光を放ちて情思溢れ
官民古より仁風を愛す

岡安千尋

南房總看櫻

驅車一日四山巡
携手媪翁相樂春
爛漫櫻花風又爽
紅雲搖漾夢中身

南房総に桜を見る

車を駆つて一日四山を巡る
手を携さふ媪翁相ひ春を楽しむ
爛漫たる桜花風又爽やかなり
紅雲揺漾夢中の身

州風 小澤克巳

偶成

歲歲欲爲如杜詩
逍遙街巷雨絲絲
杏花片片隨風舞
看過今春得句遲

手賀沼觀蓮

文人好住水雲鄉
遊客湖頭上野航
荷葉田田紅萼映
白鷗點點自悠揚

偶成

歲々為さんと欲す 杜詩の如きを
街巷を逍遙すれば 雨糸々たり
杏花片片 風に随つて舞ひ
看みす過ぐ今春 句を得ること遅し

手賀沼に蓮を觀る

文人好んで住む 水雲の郷
遊客は湖頭にて野航に上る
荷葉田田 紅萼映え
白鷗 点々 自ずから悠揚たり

春虛

木村成憲

加藤 武

春尋古寺

碧山尋古刹
苔徑幾年同
禪院已忘俗
法筵初悟空
眺禽春水上
聞磬惠風中
園裏又何見
雨花翻自紅

春に古寺を尋ぬ

碧山古刹を尋ぬれば
苔徑幾年か同じき
禪院已に俗を忘れ
法筵初めて空を悟る
禽を眺む春水の上
磬を聞く惠風の中
園裏又何をか見る
雨花翻って自ずから紅なり

小嶋明紀子

觀櫻

山櫻裊娜惠風吹
片片紅花浮水時
鶯鳥惺惺如弄笛
飛來飛去促吟詩

觀桜

山櫻裊娜惠風吹く
片々として紅花 水に浮かぶ時
鶯鳥惺々 笛を弄するが如く
飛び来り飛び去りて吟詩を促す

鳳洋 小久保洋子

堤上搖柳

良宵緩歩已深秋
堤上無雲爽氣流
裊裊搖風垂柳下
如魚葉影月明浮

堤上揺柳

良宵緩歩すれば已に深秋
堤上雲無く爽氣流る
裊々として風に揺らぐ垂柳の下
魚の如き葉影 月明に浮かぶ

斎藤香枝

秋夜吟

月明皎皎百蟲聲
疎竹當窓風露清
千里吟朋思我否
青燈醉裏已三更

秋夜吟

月明皎々百虫の聲
疎竹窓に当たつて風露清し
千里の吟朋 我を思ふや否や
青灯酔裏 已に三更

桂香

齋藤かつい

春曉送友

圍碁相戰幾星霜
朋友明朝去此鄉
睡覺鶯鳴春色遍
早梅如餞送清香

春曉友を送る

碁を囲みて相ひ戦ふ 幾星霜
朋友 明朝 此の郷を去る
睡覺すれば 鶯鳴いて春色遍し
早梅 餞するが如く清香を送る

齋藤興二

看三室戸寺蓮

炎暑來尋太古蓮
搖搖馥郁到吟邊
一詩欲作不能作
花自清清笑碧天

洗鷺 齋藤房江

三室戸寺の蓮を看る

炎暑來り尋ぬ太古の蓮
揺々馥郁吟邊に到る
一詩作らんと欲するも作る能はず
花は自ずから清々碧天に笑ふ

看菊

乘晴信步弄秋光
恰好園庭漾暗香
可看大花清婉景
賞心案句暫徜徉

菊を看る

晴に乘じ歩に信せて秋光を弄す
恰好よし園庭暗香を漾はす
看る可し大花清婉の景
賞心句を案じ暫く徜徉す

皓嬉 齋藤三千代

觀櫻

故人舊屋訪櫻花
老樹千枝競麗華
酌酒陶然吟一句
相和漾漾舞紅霞

觀櫻

故人の旧屋に桜花を訪ぬれば
老樹千枝麗華を競ふ
酒を酌み陶然として一句を吟ずれば
相ひ和して漾々紅霞舞ふ

坂本光正

春日郊行

極目東郊草色勻
薰風一路百花新
吟筇忽止酒旗店
寸酌陶然夢裡人

春日郊行

極目す東郊草色勻ひ
薰風一路百花新たなるを
吟筇忽ち止む酒旗の店
寸酌陶然夢裡の人

耕道

椎名廣

鷺湖舟行

回遊水路拂蓮通
進入莖高掩一篷
圓蓋田田花點點
幽留詩趣綠中紅

鷺湖舟行

回遊せる水路蓮を払ひて通ず
進み入れば莖高くして一篷を掩ふ
圓蓋田々花点々
幽かに詩趣を留む 緑中の紅

露山 清水義孝

雨中觀櫻

尋來江畔雨絲絲
閑潤櫻花將盡時
薄命可憐旬日壽
留紅馥郁映淪漪

雨中觀櫻

江畔を尋ね来れば雨糸々たり
閑かに潤す桜花將に尽きんとするの時
薄命憐れむ可し旬日の壽
留紅馥郁淪漪に映ず

隨貞 菅原凉子

白井八景光勝晚鐘

一遍上人行脚邊

湖平漸染夕陽天

鯨音殷殷告時處

慈愛今猶斯地傳

有恒 菅原 満

白井八景光勝の晚鐘

一遍上人行脚の辺

湖平らかにして 漸く染む 夕陽の天

鯨音殷々 時を告ぐる処

慈愛 今猶ほ斯の地に伝ふ

上苑祥風

韶光盎盎歲華新

習習祥風無俗塵

御苑逍遙鶯語滑

梅花馥郁帝城春

上苑祥風

韶光盎々 歲華新たに

習々たる祥風 俗塵無し

御苑逍遙すれば 鶯語滑らかに

梅花馥郁 帝城の春

如蘭 曾雌幸己枝

雨中有感

雨裏高官坐玉堂
美姬舞處酌金觴
不知貧邑閑人少
蓑笠泥中農事忙

雨中感有り

雨裏高官玉堂に坐し
美姬舞ふ処金觴を酌む
知らず貧邑閑人少なく
蓑笠泥中農事忙しきを

高橋秀彰

歸郷

薰風一路共歸郷
紅頰新衫步步忙
携手觸肩婚定女
相看相笑老家傍

歸郷

薰風一路共に歸郷す
紅頰新衫歩々忙し
手を携へ肩に触るるは婚定まるの女
相ひ見て相ひ笑ふ老家の傍

午睡

田邊閑雄

眞田幸村最期

眞田幸村の最期

峻嶺

津田峻一

浪花城下亂雲閒

浪花城下 乱雲の間

對峙陣門茶白山

對峙す 陣門 茶白山

奮戰幸村終力盡

奮戰せる 幸村 終に力尽く

惟今夏草夢痕閑

惟だ今 夏草 夢痕閑たり

暁舟

長島ツタエ

日比谷公園菊花盆栽展

日比谷公園菊花盆栽展

天霽清涼秋色庭

天霽れて清涼 秋色の庭

芳姿競美送幽馨

芳姿美を競ひて 幽馨を送る

曲根抱石作奇景

曲根石を抱きて 奇景を作し

金蕊晶晶如撒星

金蕊 晶々 星を撒ずるが如し

觀櫻

長堤曳杖愛花人
微聽閒閒禽語頻
拘引嬌聲三里路
瑤花點點自成春

觀櫻

長堤杖を曳く花を愛する人
微かに聴く 閒閒 禽語頻りなるを
嬌声に拘引せらるる三里の路
瑤花点々 自ずから春を成す

根津静男

驟雨

炎炎村巷一聲雷
閃閃飛光白雨來
頃刻跳珠雲忽去
猫兒眠處午涼催

驟雨

炎炎たる村巷 一声の雷
閃々たる飛光 白雨來る
頃刻珠を跳らせ 雲忽ち去り
猫兒眠る處 午涼催す

信木充子

晩春小景

綠塘坦腹見飛蜂
獵涉花間金粉鍾
忽得便風天際到
恰超銀白玉芙蓉

原口大助

晩春小景

綠塘に坦腹して飛蜂を見る
花間に獵涉して金粉を鍾む
忽ち便風を得て天際に到れば
恰も超ゆ銀白の玉芙蓉

展墓

埜田弔友澹秋光
追憶溫顏漸夕陽
墻外槿花紅散處
翩翩粉蝶尚探芳

展墓

埜田友を弔ひて秋光澹し
溫顏を追憶すれば漸く夕陽
墻外槿花紅散ずる處
翩翩たる粉蝶尚ほ芳を探る

尚堂 宮崎三郎

目黒川観櫻

香雲艷艷誘騷人
兩岸逍遙花落頻
難去依依欄獨倚
水留紅片惜殘春

目黒川観桜

香雲艷々として騷人を誘ふ
兩岸逍遙すれば花落つること頻りなり
去り難く依依として欄に独り倚れば
水は紅片を留めて残春を惜しむ

翠竹 宮本美恵子

看菊

中秋晨旦古垣邊
金粟花開帶露妍
風起入齋香馥郁
興生揮筆墨痕鮮

看菊

中秋晨旦古垣の辺
金粟花開いて露を帯びて妍なり
風起り齋に入りて香馥郁
興生じ筆を揮えば墨痕鮮やかなり

莊石 森崎直武

梅天閑詠

天空連日半晴陰
霖雨還來夏未深
露滿庭中梅子熟
詩情漸起獨閑吟

梅天閑詠

天空連日晴陰半ばす
霖雨還た來りて夏未だ深からず
露庭中に満ちて梅子熟す
詩情漸く起こり独り閑吟す

鏃風 矢尾 晃

夜登横濱摩稟塔有感

遠馳眸子宵冥茫
燦爛街衢繞塔裝
不夜港都人簇簇
徐仙後裔占觀光

夜横濱摩稟塔に登りて感有り

遠く眸子を馳すれば宵冥茫たり
燦爛たる街衢塔を繞りて装ふ
不夜の港都に人簇々
徐仙の後裔觀光を占む

八嶋溪風

哭長女逝去

宿痾臥蓐十餘秋
不步無聲發熱稠
掌裡寶珠茲散落
嘗嫺歌舞縱清遊

誼軒

柳田昌宏

長女の逝去を哭す

宿痾蓐に臥す 十余秋
歩せず声無く 発熱稠し
掌裡的宝珠 茲に散落す
嘗て嫺ひし歌舞 縦に清遊せよ

海螢

獨乘暗夜大橋過
孤嶼臨汀潮氣多
萬點青光明滅浪
九天疑是注星河

海螢

山木康義

獨り暗夜に乗じて大橋を過ぐ
孤嶼汀に臨めば潮氣多し
万點の青光明滅の浪
九天疑ふらくは是れ星河を注ぐかと

慶曾孫誕生

薰風一路坐輕車
急到團欒産後居
孫泣呱呱懷忽笑
可憐無限綠陰初

曾孫の誕生を慶ぶ

薰風一路輕車に坐す
急ぎ到る團欒産後の居
孫泣いて呱呱たるも懷けば忽ち笑ひ
可憐限りなし 綠陰の初め

和風

山下和子

高天神城跡

東風吹靄野花香
尋到孤村古戰場
探勝求詩荒草路
群山城砦想興亡

高天神城跡

東風靄を吹いて野花香し
尋ね到る孤村古戰場
勝を探り詩を求む荒草の路
群山城砦興亡を想ふ

巴溪

山田紗代子

鷺湖看蓮

輕舟速去破漪漣
忽入綠叢紅萼妍
風到搖搖香裊裊
宛如獨領水中天

鷺湖にて蓮を看る

輕舟速やかに去きて漪漣を破る
忽ち入る綠叢紅萼の妍なるに
風到りて揺々香り裊々
宛らひとり水中の天を領するが如し

芳野禎文

萬華鏡

多稜鏡裏李桃稠
筒轉翩翩黃葉秋
白雪紛紛風意冷
薔薇香處鳥聲柔

萬華鏡

多稜鏡裏李桃稠し
筒轉ずれば翩翩黃葉の秋
白雪紛々風意冷ややかに
薔薇香る處鳥聲柔らかなり

翔堂 鷺野正明

千葉県漢詩連盟 役員

顧問

石川岳堂 宇野直人 大山徳高 河内君平

川久保貞軒 廣野行甫 藤田梨那

会長 鷲野翔堂

副会長 八嶋溪風

常務理事（事務局長）菅原有恒

理事

相澤無有 青木智江 薄井暎山 椎名耕道

清水蒞山（事務局次長）津田峻嶺

鶴岡香苑 冨樫貞華 宮崎尚堂

監事 矢尾鐵風

編集後記

お陰さまで『千葉詩漢』も第四号の発行になりました。ご協力に感謝いたします。

岩かげにしたたり落つる山の水

大河となりて野を流れゆく

平成二十九年新年恒例の「歌会始の儀」で皇太子さまが詠われた歌である。連綿と続く宮中行事に思いを馳せる一方で、自らのこの一年の行動に思いをいたすのもまた新年である。

漢詩創作人口が近年減少しているという残念な状況に、歌のように「大河となりて野を流れゆく」時代がはたして来るのかどうか、心を痛めるのもまた新年ゆえなのかもしれない。大事なことは、地道に活動を広げて、「岩かげにしたたり落つる」水の量を増やす以外に道はないと論されているように感じた次第。

会員の足跡を残す作業もまた大事な役目であることを肝に命じ、次号発行にむけて意を新たにしているところです。

（清水記）

平成二十九年三月二十日

編集発行 千葉県漢詩連盟

事務局 〒二七六〇〇三三

千葉県八千代市勝田台二一七七一

菅原有恒

TEL・FAX 〇四七一四八四一九三三五

印刷 株式会社アクトローズ社